

## 地域共生ハッカソン

地域共生ハッカソンでは、大学・専門学校の学生が混成チームを組み、「地域共生」という大きなテーマの中から、各チームでテーマを設定し、意見やアイデアを出し合いながら、テクノロジーを活用した様々な課題解決手法に取り組みました。期間（令和6年10月から令和7年2月まで）を定め、他校の学生と活動を共にすることで、学生自身のキャリア形成につなげるとともに、社会課題の解決につながるイノベーションの創出にも挑戦しました。



### 令和6年度の取組

#### 参加主体のご紹介

今年度は5つの学校から4つの混成チームを構成し、各学校から1名ずつアドバイザーを迎え、学生のみなさまを中心に活動しました。

5つの学校：横浜薬科大学 / 桐蔭横浜大学 / 学校法人 岩崎学園（横浜保育福祉専門学校・横浜リハビリテーション専門学校・情報科学専門学校）

<アドバイザーの先生方>



横浜薬科大学  
田口 先生



桐蔭横浜大学  
尾山 先生



横浜保育福祉専門学校  
遠山 先生



横浜リハビリテーション専門学校  
水島 先生



情報科学専門学校  
武藤 先生

#### テーマ紹介

## 地域共生における4つのテーマ

### テーマ：地域医療

救急医療体制は患者の重症度に応じて役割が分かれており、市民は役割に応じた医療機関を正しく利用しなければ救急医療体制の維持は困難である。

アドバイザー

▶ 横浜薬科大学 田口 真穂



### テーマ：保育

インターネットやスマートフォンの普及により、子供たちは流行の音楽を聴くようになった反面、保育現場では昔ながらの楽曲を使う園と、流行の音楽を取り入れる園に分かれてしまっている。理由は様々あるが、その1つにピアノの技量差があげられる。

アドバイザー

▶ 学校法人岩崎学園  
横浜保育福祉専門学校  
遠山 真美子



### テーマ：介護・フレイル予防

フレイルとは健康な状態と、要介護状態の中間に位置する。フレイルの予防には、適度な運動や栄養管理だけでなく、社会参加等のさまざまな介入が不可欠である。

アドバイザー

▶ 桐蔭横浜大学 尾山 裕介



### テーマ：介護・高齢者支援

独居高齢者には以下の通り3つの課題がある。

- ①健康上の課題
- ②生活上の課題
- ③心理的な課題

独居老人が安心して暮らせる環境づくりのためテクノロジーの活用やコミュニティの強化が必要である。

アドバイザー

▶ 学校法人岩崎学園  
横浜リハビリテーション専門学校  
水島 真由美



テクニカルアドバイザー

学校法人岩崎学園  
情報科学専門学校 武藤 幸一



## 地域共生ハッカソンの結果



### 成果発表会を開催しました

令和7年2月23日（日・祝）、横浜市役所にて地域共生ハッカソンの集大成となる成果発表会を開催しました。

### 結果発表・表彰

厳正なる審査の結果、最終結果は以下の通りです。



政策経営局長賞 獲得点数が最も高かったチーム

地域医療チーム

ビジョナリー賞 主に着眼点・アイデアが秀でていたチーム

保育チーム

フロンティア賞 主に技術・完成度が秀でていたチーム

介護・フレイル予防チーム

フィジビリティ賞 主に実現可能性がしっかりと考慮されていたチーム

介護・高齢者支援チーム



【政策経営局長賞】地域医療チーム



リーダー：横浜薬科大学 相川さん  
2年連続参加させていただきました。今年はリーダーとして、チームをけん引できたと  
思います！



【ビジョナリー賞】保育チーム



リーダー：横浜保育福祉専門学校  
後藤さん  
参加メンバーでしっかりと  
資料を作りこめた点も評価  
いただけたのかと思います！



【フロンティア賞】介護・フレイル予防チーム



リーダー：桐蔭横浜大学 田邊さん  
チームの皆さんの力を借りて  
ここまで来ることができました。  
やってみて良かったです！



【フィジビリティ賞】介護・高齢者支援チーム



リーダー：横浜薬科大学 菅原さん  
一番重要と考える「実現可能性」  
を評価いただいたこと、うれしく  
思います！

#### 発表内容

各チームの発表内容は以下の通りです。



## 地域医療チーム

< 政策経営局長賞 >

地域医療チームは、生成AI×LINEという発想に基づき救急度判定システム「はまQ」を開発しました。

成果発表会では、重症と軽症の2つのケースに基づいた実演が行われ、救急車を呼ぶべき場合、そうでない場合の判定はもちろん、その場でイレギュラーな内容を入れてもしっかり応答する等、完成度の高さが見て取れました。



▲発表の様子



▲成果物「はまQ」

## 介護・フレイル予防チーム

< フロンティア賞 >

介護・フレイル予防チームは、北海道から沖縄を目指すボード型ゲームアプリを開発しました。日々提示されるフレイル予防に関する3つのお題のうち、1つでもクリアすると1マス進めます。また、3つともクリアすると3ポイント獲得できるといったポイント制によるモチベーションアップ策も盛り込まれています。

世界版も検討中とのことで、今後の広がりにも可能性を残しました。



▲発表の様子

## 保育チーム

< ビジナリー賞 >

保育チームは、保育者個人の技量差によって生じている音楽活動の格差を解決するため、「あそぼーる」という音を発するボールを開発しました。成果発表会では実物が披露され、ボタンを押すとボールから動物の声等の音が発せられました。

また、保育園での実践も行っており、通常のボールを使うよりも楽しそうに遊ぶ子供たちの姿を見ることができました。使う人の気持ちまでしっかりと汲み取られた成果となりました。



▲成果物「あそぼーる」

▲発表の様子

## 介護・高齢者支援チーム

< フィジビリティ賞 >

介護・高齢者支援チームは、終活を見据えた行動について研究を重ねました。ケアプラザ等の見学や、体力測定会に参加し、現場の理解を深めつつ開発を進めました。

単に人生の終わりにフォーカスするのではなく、「ライフデザイン」として、身体計測+アンケートの点数に基づいている点がユニークで、いきなりではなく緩やかに終活をサポートすることで、より敷居を低くする効果があるのではないのでしょうか。会場からは自分の点数を確認した参加者の様々な反響が聞こえてきました。



▲発表の様子

地域医療チーム発表資料 (PDF: 2,361KB)

介護・フレイル予防チーム発表資料 (PDF: 1,916KB)

保育チーム発表資料 (PDF: 1,942KB)

介護・高齢者支援チーム発表資料 (PDF: 2,119KB)

## アドバイザーからのコメント

地域共生ハッカソンでは、以下の5名の先生に取組期間を通じてアドバイザーとしてご協力いただきました。ハッカソンを終えてのコメントをご紹介します。

### 横浜薬科大学 田口先生

政策経営局長賞おめでとうございます。薬学、スポーツ科学、情報科学が融合し、5か月間で28回のミーティングを重ねて完成した、生成AI×LINEの救急判定サービス「はまQ」。実習や試験で足並みが揃いにいく中、議事録や動画共有などで連携する工夫は見事でした。

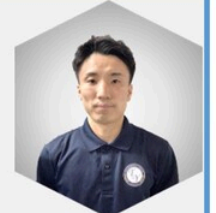
知識やデータのみならず、現場のヒアリングやデモ体験を通じて成長していく学生を見守ることができました。



### 桐蔭横浜大学 尾山先生

素晴らしいアイデアや着眼点に刺激を受け、私自身も多くのことを学びました。異なる専門分野の学生がディスカッションを重ね、アイデアを形にしていく過程を通じて、協働の大切さを改めて実感しました。

仲間と共に目標に向かって進む難しさや楽しさも経験できたと思います。この学びが、今後の学生生活や社会での活躍に少しでも役立つことを願っています。



### 横浜保育福祉専門学校 遠山先生

保育現場の環境設定を問わず音楽活動が展開できる玩具の企画・開発に学生のアイデアが結集！アプリとの連動で子どもの好奇心を引き出す遊びや、発達の効果が見込める機能を備えた〈あそぼーる〉が誕生しました。園児との実践を経て、今後は各機能のバージョンアップにより、子どもだけでなく幅広い世代での活用が期待できます♪



### 横浜リハビリテーション専門学校 水島先生

本チームは、エンディングノートのデジタル化について取り組みました。独居高齢者の終活課題に、身体測定やアンケートで意識を高めるアプリ開発、素晴らしい着眼点です。負担感の少ないアプローチで、多くの方に利用される可能性を感じました。今後のアップデートで、更なる機能拡充と使いやすさの向上を期待しています。



### 情報科学専門学校 武藤先生 (テクニカルアドバイザー)

様々な技術が登場し、課題に対する解決策が複数ある中、4チームの中でもスマホアプリ・生成AIによるチャットボット・IoTを使ったおもちゃなど様々な技術が使われていました。それらは決して技術主体ではなく、課題の当事者と向き合い最適な技術を組み合わせた解決方法を模索した結果だと思います。ぜひ実用化も目指して下さい！



## 参加企業様からのコメント

株式会社ツクイ様より、全体に向けてコメントを頂戴しました。

株式会社ツクイ ミライ想造部 小島 様

地域共生ハッカソンに参加させていただきありがとうございました。大学・専門学校の学生が協力して、さまざまな社会課題解決に取り組み、短期間ながらも素晴らしい成果を上げています。学生の成長する姿がとても印象的で、人材育成やキャリア形成に非常に有効だと感じました。社会課題解決にも貢献できる素晴らしい取り組みだと思います。



富士ソフト株式会社様より、特に技術的な視点でコメントを頂戴しました。

富士ソフト株式会社 ソリューション事業本部 茂木 様

今回のハッカソンはツールを作り上げるだけでなく、社会貢献まで視野に入れたとても良い取り組みだと捉えています。技術的な視点から言えば、サービスの新しい使い方や利用者の意識を変える仕組みを実現するために、技術者としては抽象的だったり実現性が見えにくかったりと苦労されたはずですが、それでも開発を行うことは技術者として1つの姿勢であり、素晴らしいと思います。



## 審査員のご紹介

審査員は以下4名にて執り行いました。



株式会社ツクイ ミライ想造部 部長 小島 聡 様



学校法人岩崎学園 情報科学専門学校 技監 武藤 幸一 様



保土ケ谷区 福祉保健センター長 室山 孝子



横浜市 政策経営局 共創推進課長 古瀬 謙一

## 参考

- ・横浜薬科大学（外部サイト）
- ・桐蔭横浜大学（外部サイト）
- ・岩崎学園（外部サイト）

## 成果発表会までの経過

### キックオフイベントの様子

10月3日(木曜日)、ハッカソンの幕開けとなるキックオフイベントを、岩崎学園様に会場をご提供いただき開催しました。

当日は、学生のみならずがテーマごとに混成チームを構成し、課題認識をさらに深め、アイデアを出し合って今後の方向性について熱く議論を交わしました。

キックオフの後、チームごとに内容を持ち帰り、最終的なソリューションの実装に向け、さらに取り組みを加速しました。



共創推進課 曽根担当

### 全体を振り返って ※掲載当時の表現をそのまま残しています

前半は横浜市役所共創推進課長の挨拶で始まり、株式会社ツクイより、小島様から基調講演をいただき、多様な主体が関わることの意義や、イノベーションの創出について学ぶ場となりました。



後半はチームごとに集まり、自己紹介と今後の運営方法を決定。その後は今後の方向性を定める議論として、課題認識の共有・深掘り、ブレスト等、様々な角度から意見を交わしました。また、介護・高齢者支援チームには、富士ソフト株式会社より、茂木様にもご助言をいただきました。発表に向け時間が限られる中、リミットが迫るにつれ、議論は白熱の様相を呈しました。当日、完全燃焼し、方向性を完璧に決め切れたチームはおそらくないと思います。それもそのはず。今日はキックオフですから、議論し尽くせず、「もっと話したい!」くらいで終わるのが丁度いいのではないのでしょうか。学生のみなさまが繰り広げるこれらの展開に大いに期待したいところです。



## チームごとの議論の様子

### - 地域医療チーム -



まずは現状把握の必要性を共有し、実装というゴールを見据えていた

### - 介護・フレイル予防チーム -



全員でブレストを行い、身体・精神・社会の視点から議論を深めていた

### - 保育チーム -



リトミックやSNSの活用など、アイデアをツリーで展開し関連付けていた

### - 介護・高齢者支援チーム -



エンディングノートがどうしたら活用されるのか、ICTとの連動を検討していた

## 中間発表会の様子

### 新メンバーが増えました

10月3日のキックオフ以降、情報科学専門学校のみなさまを中心に、複数の学生にハッカソンへ興味をもっていただきました。その結果、新たな参加メンバーが増え、全体で約40名となりました。



## 全体を振り返って ※掲載当時の表現をそのまま残しています

12月19日(木曜日)横浜市役所市民協働推進センタースペースABにおいて、ハッカソンの中間発表会を開催いたしました。10月のキックオフから研究を重ねた各チームの取組について、それぞれ今の現状を発表していただきました。当日は、アドバイザーの先生方をはじめ、株式会社ツクイの小島様、横浜市デジタル統括本部の職員等、各方面からコメントやアドバイスを頂戴し、2月の成果発表会につなげることができました。

もちろんこれまでの活動を振り返れば、「万全の準備ができた！」というチームもあれば、「ここまでしかできなかった…でも成果発表会には！」というチームもあると思います。ぜひ、成果発表会で全員が完全燃焼できるよう、引き続き取り組んでいきましょう！

## チーム毎の発表の様子

### 地域医療チーム

地域医療チームは、利用者の方が救急車を呼ぶべきか迷った際、スムーズな判断のサポートができるようにしたいという思いから、救急車の適正利用について取り組んでいます。具体的には、現状の緊急度判定プロトコルをさらにアップデートし、LINEを活用した緊急度判定サービスを作成することを目指しています。

音声認識やテキスト認識の精度という課題もありつつ、2月の成果発表会に向け、さらなるブラッシュアップが期待できそうです。また、事前の服薬情報の登録等、横浜薬科大学のメンバーならではの視点も盛り込まれています。



### 介護・フレイル予防チーム

介護・フレイル予防チームは、健康な状態と要介護の状態の中間に位置する「フレイル」を予防することをテーマに、外出や運動を促すことで他者との交流や筋力づくりを実現しつつ、さらにストレス発散と認知症予防につながるような行動を喚起するアプリ開発を目指しています。

ポイントは「無理のない範囲で続けられる」ものであること。そのために、利用者が毎日利用できるように娯楽要素を盛り込んだすごろくのような形式で、日本列島を歩いていく構想ができています。毎日利用してもらえるようログインボーナスを盛り込む等、現代の若者らしい着想も含まれています。





## 保育チーム

保育チームは、保育現場での音楽の活用に、人員等の事情や個人の能力による格差が存在するという課題を背景に、どの保育園でも音楽活動が円滑かつ平等に行えるよう取り組みを行っています。協調性やリズム感、言語能力の向上等、子育てにおいて幼少期に音楽が与える影響は多分にあり、保育チームでは玩具に焦点を当て、開発を行っています。

玩具の形状や素材も具体的に定まっており、中でも驚きは、既に試作機ができています。また、耐久性や、鳴らす音楽のレパートリー等の課題も明確になっています。実際に、横浜保育福祉専門学校の保育現場で運用試験もプランに入っています。



## 介護・高齢者支援チーム

介護・高齢者支援チームは、地域に一人で住んでいる高齢者（いわゆる「おひとりさま」）に対してなにかサポートできるようなことはないかというテーマで、情報登録システムを活用して終活をサポートする取組を行っています。現行の仕組みが幾つか存在する中で、仕組みはあれど、利用者の方が主体的に利用したいようなサービスであることが重要であると捉え、サービスの名称を親しみやすくすることや、活用の流れ、展開の場所等を工夫する等により、さらに広範な方々に使ってもらえるようなサービスを目指しています。

また、終活とは言うものの、いきなり人生のエンディングを考えると少々ハードルが高いため、ライフデザインから緩やかにエンディングを考える形式を見据えている着眼点も興味深いです。



## 主催



## このページへのお問合せ

政策経営局共創推進室共創推進課

電話：045-671-4391 ファクス：045-664-3501

メールアドレス：[ss-kyoso@city.yokohama.lg.jp](mailto:ss-kyoso@city.yokohama.lg.jp)

ページID：321-448-621

## 横浜市役所

〒231-0005 横浜市中区本町6丁目50番地の10

法人番号：3000020141003

開庁時間：月曜日から金曜日の午前8時45分から午後5時15分まで  
（祝日・休日・12月29日から1月3日を除く）

※一部の窓口では開庁時間が異なる場合があります

Copyright © City of Yokohama. All rights reserved.